

教育心理学教室教官の研究状況報告

ジウムが、今年度も53年1月、箱根において設けられた。その直前、前会長、久保良敏教授の急逝にあって、深い哀悼の意を表しつつ、急拠、その役割をになわされで第1のシンポジウム「進路相談をめぐって」で司会の労をとることになった。その経過は、東京大学でまとめられた、本会議報告に所載されている。さらにまた、

それに先立つ52年7月、蔵王で開かれた、本会議主催の、学生相談担当者のエンカウンター・グループへ、その前年度にひきつづき参加することによって、出会い体験を新たにし、私なりの自己開発を深めることが出来たのも、この年度の研究活動として忘れがたいものがある。
(昭和53年8月6日)

研究の課題と経過について 梶 田 正 巳

1. 学習型(様式)等の研究について

認知発達と学習型(様式)の関連性について、ここ数年、継続して研究をしてきた。本年も愛知教育大学助教授、中野靖彦氏と共同で前著「対連合学習における学習型の研究」(名古屋大学教育学部紀要 1977 24巻)を発展させるため、発達の視点から分析を試みた。研究の一部分は、本年度の日本心理学会42回大会(九州大学教育学部)において発表される予定である。今回の報告では幼稚園児から小学生に至る段階で、学習到達度の上、中、下位群によって、とられる学習型(様式)の異なることが示唆されており、論文として明確にくぎをつけておく必要を感じている。

次に昨年の暮れから、新たにスタートした「選択的注意」の研究について述べておきたい。注意についての問題意識は、今からおよそ10年余り前にさかのぼるが、Zeaman & House (1963)や Wycoff, Mackintoshらの観察反応理論、注意理論に触発された時から継続していた。幸い、関心を同じくする人々のグループが成立し、年始めに、偶発学習と成素選択のパラダイムを使った選択的注意の諸研究を展望することとなった。また、実験的研究も試みられた。これらの成果は、学習研究グループの Authorshipで「選択的注意の最近の研究—偶発学習と成素選択パラダイムの諸問題」、 「子どもの学習過程における選択的注意の研究」として

本紀要に公刊されることとなった。この研究領域を概観してみると、実に多くの問題が未開拓のまま残っているのがわかる。これらの問題を今後、掘り下げていく予定である。

2. 教授=学習過程の研究について

この問題は、あまりにも複雑で全く暗中模索の域を出ない。本学名誉教授の塩田芳久教授、杉江助手らとともに、学習指導研究会を一昨年から続けている。本会は、一口にいて、研究者が現場の先生方から問題提起を受けて考えたり、また、さまざまな実践的課題について学習する会となっている。この会の2年間は、筆者自身にとっても、実に捻りの多いものであった。その恩恵を受けて、Classroom learning, School learning についての構想がまとまりつつある。現在、数名の方々と研究会をもちながら、Classroom learning の稿を執筆しつつあるが、本年度中には、この段階における到達点を示すことができるものと思う。

なお、以上の研究の他にも、若干の研究活動をした。その主要なるものについて記す。

- 1) 北尾倫彦, 杉村健, 山内弘継, 梶田正巳 「教心理学」 有斐閣新書 1977, 11月 有斐閣
- 2) 「知識獲得と有意味学習」, 北尾倫彦編 「学習の心理—教科学習の基礎」 1978, 5月 ミネルヴァ書房